学戦都市の影姫

雪楓??

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学戦都市の桜姫の改稿版です!!

改稿前の設定をほとんど引き継いでいますが、大幅に変更している部分もあるので新しい作品として読んでいただけたらとおもいます。

目次

1話 …… 1
2話 …… 3
3話 …… 5
4話 …… 9
5話 …… 11
6話 …… 13
7話 …… 17
8話 …… 19
9話 …… 21

1話

「俺は、東雲琴音お前に決闘を挑む！」

意気揚々と私たち中等部三年の教室のドアで馬鹿なことを言っているのは我が学園全生徒のトップである星導学園序列一位の一ノ瀬翔。現在高等部2年の彼が序列一位の座に就いたのは高等部一年のことで、それ以来一年間その座を守り抜いていることから彼の実力が決して低くないことがうかがが得る。そんな彼が何故わざわざ私のような［冒頭の十二人］にも入っていないような者に決闘を挑むのだろうか。

「あら、琴音またですか？」

「またもなにも、私は一度も同意したことなんてないよ……」

決闘という制度はその性質上様々な目的で行われる。多くの場合は、自らよりも序列が上の者を倒すことで自らの序列を上げることを目的としている。だが、たまに異性の相手を遊びに誘ったりする口実として使う者もおり、ちなみに今回の一ノ瀬先輩は後者である。

「それで、受けてくれるのか？」

「わっ……」

いつの間にか、私の机の前に来ていた一ノ瀬先輩に驚いて素っ頓狂な声を出してしまった。

色々な理由から自分から目立つつもりはない私にとって、なんの利益のない決闘。受けるつもりは毛頭なかった。

「えっと……お断り…」

「えぇ、勿論受けますよ」

「……クローディア!?」

毎回のことの、この腹黒生徒会長の横暴。

こんなんだから女狐とか言われるのだ。

「よし!!それじゃあ、明日はよろしくな」

「あ……」

私が静止を促す前に一ノ瀬先輩は教室から出て行ってしまった。

勿論、私の瞳は一ノ瀬先輩が出て行った教室のドアからクローディ

アへと移動した。
「これで、琴音も実力通りの序列ですね！」
「……私あんまり目立ちたくないんだけど……」
家業の関係上、目立つことはあまり好ましいことではない。とはいえ、それ自体は嘘ではないとはいえ私が目立ちたくないことの言い訳に使っていることに過ぎないのだけれど。
「そのことなら、琴音のお母さま直々に許可をいただきましたから大丈夫ですよ！」
そう言って目を輝かせながらクローディアは母の署名の入った電子メールを私に突きつけた。
「（母さん……）……わかったよ……受ければいいんでしょ」
「ええ。それにしても、琴音〝勝てない〟とは言わないのですね」
確かに私は一度も勝てないとは言ってないが、わざわざそのことをつついてくる辺り流石の性格の悪さだろう。とは言え、私自身負けるつもりは毛頭ない。
「……負けるわけにもいかないよ。……当主としてね」
「……そうでしたね。明日楽しみにしてますよ、そろそろ琴音の全力見てみたいですし」
そういうとクローディアは手を振りながら教室を出て行った。
（……みんなして、都合がいいんだから……）
母とクローディアの連携に内心ため息を吐きながら、私も教室を出て寮へと向かった。

2話

「なんでこんなことになってるんですかね…、先輩」
「いやぁ、それがさ……」
私と先輩の周りには取り囲むように多くの学生が決闘が始まるのを今か今かと待ち構えている。
何故このようになったか。それは全てある一人の人物のせいである。
そして、その張本人は一ノ瀬先輩の言葉を遮るように高らかに宣言をする。
「この決闘は、私星導学園性生徒会長であるクローディア・エンフィールドが取り仕切らせて貰います」
このオーディオエンスとも言える大衆をかき集めた本人。今朝、学園中に決闘の情報が流れていた時はその仕事の早さに驚きを通り越して呆れたものだ。
（……きっと、隣でげっそりしてる夜吹くんが徹夜したんだろうけど）
クローディアの横でげっそりしている彼は訳あって私の数少ない仲の良い男子生徒の1人である。
「さて、そろそろ始めようぜ？周りの奴らも退屈してるみたいだし」
「不撓の証たる赤蓮の名の下に、我一ノ瀬翔は汝東雲琴音への決闘を申請する」
「我東雲琴音は、汝一ノ瀬翔の決闘申請を受諾する」
私たちの宣言と共に、校章が輝く。
これがここでの決闘の合図だ。
（……流石早い）
彼の魔術師としての実力は六花でも指折りであり、その戦い方は氷を操る実に美しいもの。
私は自分に迫る氷に対し、退くのではなく真っ直ぐ突っ込む。
「……黒影」
鞘から抜いた私の純星煌式武装〝黒影〟は既に解放状態。

迫りくる氷は全てわたしの目の前で消滅する。
そのまま一ノ瀬先輩に向かって刀を真っ直ぐと伸ばす。
しかし、私の剣先が校章まであと一歩というところで、私は思いっ切り後ろへと飛ぶことになった。
「……一筋縄じゃいきませんか」
私が居た一歩先のところには、氷の刃ともいうべき細かい結晶のようなものがちりばめられている。
それは一ノ瀬先輩を守るように、彼の周りを漂っていた。
「まさかいきなり切り札を使うなんて思わなかったぜ」
切り札。
確かに彼のあの防御を崩すのは容易ではないし、尚且つあの氷の刃から自分の身を守るということを同時に行わなければいけないのだ。
”黒影”の能力を最大限使えば負けるなんてことは無いが、あの能力は人前で易々と使うものでもないし、下手したら相手の命を奪いかねない。
「(仕方ない…少しだけ)……覚悟してくださいね」
黒影を鞘へと戻し、星辰力を流す。
「……解放(リリース)」
私の足元から黒い影が一ノ瀬先輩に向かって一直線に伸びる。
そして、次の瞬間私の抜いた刀は一ノ瀬先輩の校章を真っ二つに切り裂いていた。
「チェックメイト…です」
『校章破壊　勝者東雲琴音』
無機質な声が私の勝利を告げ、周りにいた観客たちも湧き上がる。
「いやぁ、情けねぇな。後輩の女の子にコテンパンにやられるとはな」
その言葉同様、座り込んでいる一ノ瀬先輩の顔は笑っているが地面をつかんでいるその手は震えていた。
「お手合わせありがとうございました」
命のやり取りではなかったとはいえ、勝った私にあまり物を言われるのはいい気がしないはずだ。
私は一礼だけして、その場所を立ち去り寮へと一人戻った。

3話

あの決闘から早いことで一ヶ月。
私も身の回りの変化に漸く慣れてきた。とはいえ、知らない人からの異常な好意などには未だに慣れず少し恐怖を覚えることも少なくはない。
「それで、わざわざこんなところまで呼び出して何の用？聖ガラードワース学園の生徒会長さん」
「わざわざ来てもらって申し訳ないね。琴音」
目の前に立つ如何にも爽やかそうなイケメン。聖ガラードワース学園の生徒会長にして、序列一位でもあるアーネスト・フェアクロウ。
彼とは実家の家業の関係で知り合ったため、彼は私の裏の顔も知っている。他に六花で知っているのは、クローディアと夜吹くん、そしてこのアーネスト。あともう一人いるのだが、彼女の関しては私自身もあまりよくわからない。母さんとも異様に仲がいいし。
「それでわざわざ何の用？」
わざわざ呼び出したのだ、それなりの理由があるのだろう。
どこぞの女狐のようになんの用もなく呼び出す人も稀にいるが。
「用があるのは僕じゃないんだ」
そう彼が言うなり、物陰から出てきた陰に私は見覚えはなかった。ただどこかで彼女の雰囲気には覚えがあった。
「えと。どちらさま？」
雰囲気には覚えがあったが、覚えのない相手であることには間違いがなかった。
「あっ、ごめんなさい」
そう言うと彼女は変装を解いた。
髪は先ほどまでの茶色の髪から、まるでかの世界の歌姫のような鮮やかな色の紫色に変わった。
「まさか……」
「えっと、シルヴィア・リューネハイムです。初めまして、【影姫】……いえ、東雲琴音さん」

紛れもなく本物の世界の歌姫。
彼女のファンは全世界におり、もちろんここ六花にも大勢いる。ちなみに、私もその一人である。
「……本物っ！大ファンです!!」
私は考えるまえに、彼女の手を握っていた。
冷静に考えてみれば、我ながら恥ずかしい。
あまりにも突然の本人の登場にファンとしての気持ちが抑えられなかったのだ。
「あっ、、ごめんなさい」
少し冷静になったところで私は手を離そうとした。
だが、それはかなわなかった。
「嬉しい!!あの時は本当にありがとう!!」
「……はい？」
シルヴィアさんに引き戻された手を見つめながら私の頭は混乱した。
目の前にいる世界の歌姫が言っていることが理解し難いことだったから。

少したって冷静になった私は、この場を提供したアーネストにどういうことか確認を取ろうとしたのだが。
「……アーネストっ……」
いつの間にか彼の姿はなくなっていた。
大方、自分の役割は終わったとか思ってそうそうに去っていたのだろう。
「（……アーネストめ）あ、あの……シルヴィアさん」
未だに私の手を握っているシルヴィアさんに事情を聞こうと私は落ち着かせることにした。
「あっ、ごめんなさい。私ったら……」
改めて落ち着いたシルヴィアさんの話によると、私のことを彼女は元々知っていたらしい。５．６年前にあった、反政府勢力による人質事件の解決を請け負ったときのこと。彼女は人質の一人として捕ら

えられていたらしく、その際助けた私のことを覚えていてくれたとのこと。だが、そんな現場で私も名乗っているわけもなく私が使っていた〝黒影〟だけを頼りに探してくれていたらしい。
そこでこの間の一ノ瀬先輩との決闘の映像をたまたまクローディアから見せられたアーネスト経由でシルヴィアさんが私を見つけ、今に至るとのことらしい。
「てことは、シルヴィアさんも知ってるんだよね……」
助けた相手とはいえ、私の裏の顔を知っている人が増えるというのはあまり芳しいことではない。
まして、人に褒められるような家業でもないため多くの人に知られるというのは私としてはあまり喜ばしくない。
「うん。でも、あなたが困るようなことはしないし、誰にも言わないよ！」
笑顔でそう言うシルヴィアさんの言葉は嘘を吐いているようには思えなかった。
「それで、お願いなんだけど……私と友達になって欲しいんだけど……だめかな？」
先ほどとは、打って変わってしおらしいシルヴィアさんの表情に私の中から断るなんて選択肢はなくなった。
元々、断るつもりなんて毛頭ないのだけれど。
「うん、こちらこそよろしく。シルヴィアさん！」
「やった！よろしく、琴音？」
喜んでくれたシルヴィアさんだが、なんだか不満そうであった。
「えっと、シルヴィア？」
これでもシルヴィアさんの表情は晴れなかった。
「……シルヴィって、呼んでほしいな」
そう言ったシルヴィアさんはとても可愛らしく、思い切って抱きしめたくなってしまったがなんとか留まることができた。
「うん、わかったよ。シルヴィ」
少し曇っていたシルヴィの表情もとても明るく晴れやかなものとなった。

こんな表情のシルヴィが見れた私は世界一幸せなファンであろう。
「それじゃあ、これからもよろしくね」
「うんっ！」
こうして、私の秘密を知る大切な友人が一人増えた。

4話

あの決闘から数ヶ月。
私の平穏な学生生活はどこかへと消えていた。
毎日のように下駄箱を埋め尽くすファンレターと決闘の申し込み。
「はぁ……なんでこんなことに」
いつものように机に不貞寝していると、視界の端に綺麗な金髪が映る。
「学園の一位ですからね」
いつの間にか横に立っていたクローディアから言われたことは、まさにその通りである。
各学園の序列一位というのは、それなりの地位であるため目指している生徒も少なくはない。
それに加えて、私の場合は彼の影響も少なくない。
「アーネストと立会なんてするんじゃなかった」
一ノ瀬先輩との決闘以上に影響を与えたのがアーネストとの決闘。
彼の知名度も相まって、私の知名度も爆上がりしてしまった。
その結果私についた二つ名「影姫」も、今ではアスタリスクのちょっとしたビッグネームも一つになっていたりもする。
次回の王竜星武祭の優勝候補筆頭のオーフェリア・ランドルーフェンの対抗馬としても、私は有力候補らしい。
元より各学園の序列一位のうち、ソロの王竜星武祭に出場するのは三校。アーネストは純星煌式武装との兼ね合いで出場できないし、界龍の星露は年齢不足。アルルンカントに関しては王竜星武祭に出てきたのを見たこともない。
結果、残りはレヴォルフのオーフェリア・ランドルーフェン、クインヴェールのシルヴィ、そして星導館の私ということになり、当然のように優勝候補に挙げられているわけである。
「ところで、王竜星武祭には出場するんですか？」
私の思考を読んだかのように、クローディアは尋ねてきた。
「それが、まだ考え中なんだよね……」

周りの期待はさておき、私自身まだ出場するかどうかまだ決めかねている。
確かに腕試しという点ではこれ以上ない場所ではあるのだが、幾分気が乗らない。
私自身にとって、刀を抜くというのは命のやり取りを意味する。
だからとは言わないが、私はアスタリスクに来てから一度も黒影を完全解放状態にしたことはない。手を抜いているとは言わないが、全力で戦わない私が出て易々と勝てる相手ばかりでもない。
「……生徒会長の立場では出場してほしいのですが、出場するもしないも琴音の自由ですからね」
それだけ言うとクローディアは足早にどこかへと行ってしまった。
クローディア自身もかなりの実力者だが、彼女は王竜星武祭には出場することはない。純星煌式武装のこともあるが、一番の理由は優勝の難しさだろうソロというだけあって、ペアや団体のほかの星武祭と違い出場選手も多く単純に優勝が難しい。
クローディアの目的は知らないが彼女は、星武祭の優勝にかなり固執している。だからこそ、彼女は王竜星武祭には参加しないのだ。
（……どうしたものかな）
私は一旦考えるのをやめ、もう一度机に顔を伏せた。

5話

「まだ遅い……」
私の記憶の中の彼の剣は、もっと美しく、なにより速い。
今はもう見ることは出来ないが、彼の剣が私の中には強く残っている。
「……精が出ますね、琴音」
こちらへと歩いてきた彼女、そう言いながらタオルを私に投げてきた。
私はタオルを有難く受け取り、軽く額の汗を拭きとった。
「やはり、琴音の剣裁きをみていると自信をなくしますね……」
クローディアは落ち込んだように、腰に差している〝パン＝ドラ〟をなでた。
彼女自身、〝千見の盟主〟という二つ名を持つ実力者であり、〝パン＝ドラ〟の制約上王竜星武祭には出場することはないが、その実力は六花でも上位に食い込む。
「…手合わせでもする？」
「遠慮しておきます。あなたの相手をするぐらいなら事務処理をしてきますよ」
私の提案を即座に断ると、クローディアは私の後ろを眺めるように微笑んだ。
「その強さの先、私も見てみたいものです」
そういうとクローディアはそのまま、校舎の方へと歩いて行った。
「……どうしたんだろう」
クローディアが一瞬見せた寂しそうな表情が、私の心に少し引っかかった。

「編入生だ。みんな仲良くしてやってくれ」
担任の先生がそう紹介したのは、いかにもお嬢様といった風貌の女の子だった。

綺麗な長いピンク色の髪に、エメラルドグリーンの瞳は、まるでお人形のようにも見える。
しかし、彼女の放つ空気はどこか棘があり、誰も寄せ付けない。そう言っているようにも感じた。
（……随分とげとげしい。まるで、オーフェリア・ランドルーフェンみたい）
〝孤毒の魔女〟の２つ名をもつオーフェリア・ランドルーフェンは、その２つ名の通り誰とも関わろうとしない。私自身も、彼女は遠目から見たことがある程度だが、編入生の彼女は孤毒の魔女ほどではないが、それに近い雰囲気を持っていた。
「……まるで、本気の時の琴音みたいですね。まぁ、琴音と比べたら猛獣と小動物ぐらいの差はありますが」
私の後ろの席からぼそっと悪口のようなものが聞こえたが、私はスルーを決め込んだ。
「ユリス＝アレクシア・フォン・リースフェルト」
編入生はそれだけ言うと、また黙った。
「…まぁみんな仲良くしてやってくれ。わからないことは、生徒会長のクローディアに聞いてくれ」
「お任せください。ユリスさんもよろしくお願い致しますね」
先生も流石の無愛想さに戸惑いながら、あとのことはクローディアに投げた。
当の本人であるクローディアはあまり気にしていないというよりは、あの編入生に興味津々のようだ。

6話

王竜星武祭まで数ヶ月と迫り、星導館の序列争いもやや盛り上がっていた。

他校と比べ、絶対的な実力者が少ないこともありここ数日、冒頭の十二人〈ページワン〉ですらも固定されていない。

そんな乱戦の中、編入生でありながらユリス＝アレクシア・フォン・リースフェルトはいつの間にか序列五位まで駆け上がっていた。

「……おかしい」

「なにがですか？」

屋上で寝そべっていた私の呟きに反応したのは当たり前のように横に座っているクローディア。

「序列三位までは全員一度は決闘してるのに、なんで私たちは一度も挑まれてすらないの？」

クローディアがいることにはツッコまず、私は疑問に思っていることをクローディアに聞いた。

うちの学校は基本的には誰でも序列をかけて決闘することが出来る。それにも関わらず、私もクローディアも決闘の話すら来ないのだ。

「……さぁ？ですが、琴音に挑む命知らずはいないでしょうね」

「そうかなぁ。案外何とかなるかもしれないのに」

負ければ少しの期間、挑戦権がなくなるとはいえ未来永劫なくなるわけではない。それに、能力の相性さえ良ければ序列下位が格上に勝つということも珍しくもない。

「……琴音に本気にでもなられたら、立っているのも大変ですよ」

そう言いながらクローディアは校舎の中に戻っていった。

「……人を化け物みたいに言うなっ」

もう一度仰向けになり、そのまま瞼を閉じた。

私のお昼寝は予想外の人の手によって終わりを告げた。
「……っん。誰？」
突然現れた人物の気配により、私は目を覚ました。
一歩ずつ近づいてくる、その人物を視認しながら私は背中を伸ばした。
気配から敵意は感じられなかったため警戒はしなかったが、その動作の一つ一つから実力者であることが伝わるほど、その所作は研ぎ澄まされている。
「琴音様、このような場所で居眠りされるのはいかがなものかと」
目の前の人物は、私から少し離れたとこで片膝をつけてそう言った。
「……うるさいよ、総ちゃん」
私がそう呼んだ人物は、私の親友であり最も信頼している部下の一人でもある沖田総司であった。
「ですが、ダメですよ？いくら琴音とはいえ、寝ている時はただの女の子ですし、なにより辻斬りが最近出現しているそうですから」
私が総ちゃんと呼んだことから、若干ではあるが口調を崩して話した。
一応主従関係はあるものの、親友である総ちゃんにかしこまられるのはどことなく寂しいものだ。
「辻斬り？」
「えぇ。そのことについて、奥様より言伝を預かっています」
一瞬流れていた和やかな空気も、総司の真面目な口調により引き締まる。
総司の説明によると、その辻斬りというのは最近六花に現れたらしい。
星導館の序列上位者が狙われているらしく、その関係で最近序列の変動が激化しているとのこと。
「こっちに来ているには総司だけ？」
「はい。私と琴音様の二人でとのことです」

隠居したとは言え、現在は東雲家の舵は母がとっている。
私が六花に来ていることも、そうなのだが私の能力が集団戦に向かないことも一応関係している。
だから、母が私を動かす時はそれ相応の理由があるし今回のように少数精鋭で任務に当たることが多い。
「なるほどね。でも、ただの辻斬りならうちが出るような案件でもないよね」
「それが、この一件菅生家が行っている可能性が高いとのことで、菅生家の方は本家が対応、菅生家の一人息子である菅生信明と辻斬りについて琴音様に一任するとのことです」
「……菅生家ね」
日本にある四大財閥の一つである菅生家は、暗い噂が絶えない一族であった。
金儲けのためならば、手段は問わないスタイルであり、今まで重ねた悪行は数え切れない。しかしながら、尻尾は決して掴ませない徹底ぶりであり姑息さで右に出るものはいなかった。
その菅生家が今回、一人息子のためとは言え動いてくれたとなれば日本の暗部として見逃すわけにはいかないということだろう。
「……それにしても、知らなかったわ。あの菅生家の一人息子が星導館にいたなんて」
かれこれ、二年ほどこの学園に在籍していたが菅生家の一人息子がいるなんて話聞いたこともなかった。
実力がなくとも、実家のネームバリューからして有名になりそうなものだが。
「琴音は、他人に対して基本的には無関心ですからね」
「……悪かったわね」
不貞腐れるように私は頬を膨らませる。
「……では、私は辻斬りについて調べて参ります。琴音様もどうかお気を付けて」
「……わかった、総司もね」
総司はクスりと笑うと、その場から消えるようにどこかへと行っ

た。
（……菅生信明か。取り敢えず、どんな生徒か調べるところからかな）
私はこの学園の生徒を知り尽くしているある人物の元へと向かうことにした。

7話

「それで私のところに来たんですね……」
　私が最初に訪れたのは、この学園の生徒会長であるクローディアの場所だった。
　クローディアは、私が生徒会室に訪れた時は晴れやかな表情だったが要件を伝えると少し落胆した様に見えた。
「この学園のことでクローディア知らないことなさそうだし、私の素性も知ってるからね」
「……そうですね。菅生信明という生徒は確かにこの学園に在籍しています。ですが、私もどういう人物かはあまりわかりません」
　クローディアは、菅生信明のデータベースを見せながら知っている限りの情報を話始めた。
　彼、菅生信明はこの学園に二年前に入学して以来何もしていなかった。星武祭参加はおろか、決闘も行っていない。
　学業成績も特別優れていることもなく、目立たない生徒であるということしかわからなかった。
「……なんて言うか、不気味だね」
「えぇ。私も菅生家の御曹司ということを忘れかけていました」
　菅生家という世界的にも有名な財閥の御曹司にも関わらず、ここまで情報がないのは不気味としか言いようがなかった。
　決闘を一度もしていないことに加えて、彼は純星煌式武装の所持申請もしていなかった。誰でも所持しているものではないとはいえ、菅生家の御曹司が所持していないのは、おかしな話である。
「……気が進まないけど、彼らに頼もうかな」
　クローディアですらここまで情報がない相手を調べ上げるというのは、骨が折れるというレベルではない。
　とは言え、直属でない彼らに頼むのはどこか気が引ける。
「……影星ですか」
　影星は、星導館の経営母体である〝銀河〟の暗部である。
　六花に存在する各校の経営母体はそれぞれ暗部を抱えており、それ

ぞれが独立したものとして存在している。
　それら暗部を取り仕切っているのが東雲家であるのだが、それぞれに東雲家とは別に直属の組織があるため一枚岩ともいかない。
「あんまり権力を振りかざすのは好きじゃないけど、仕方ないかな」
「夜吹くんを呼びますか？」
　夜吹くんは学生でありながら影星の一員である。
　最近では影星というよりは、クローディアお抱えの部下のような気もしなくもないが。
「いや、直接行くよ」
　夜吹くんを呼び出す方が楽ではあるが、彼を駒使いしすぎるのも悪い。
　なにより、そろそろ影星の様子を直接見ておきたいという考えもあった。

「そうですか。一応、こちらでも調べてみます。要らない心配かとは思いますが、お気をつけて」
「ありがと。それじゃ」
　私はクローディアに背を向け、生徒会室を後にした。

8話

翌日、私は影星がアジトとしている銀河所有のビルに向かった。
しかし、アジトとは名ばかりで彼らがここにいることはなく、私たちも居場所は把握できていない。
「わざわざお出向き頂かなくても、連絡さえいただければこちらから伺いましたのに」
私が通された一室に佇んでいた男は、私の姿を確認するとわざとらしく頭を深く下げた。
「いえ、こちらの事情であなた方を動かすわけにもいかないですから」
「……お気遣い感謝します」
目の前の男は一瞬、苦虫を噛み潰したような表情を見せた。
影星の現トップのこの男は、〝夜吹の一族（ナイトエミット）〟と呼ばれる忍びの一族の当主であり、あの夜吹くんの父親でもある。
元々、影星と夜吹の一族は同じ銀河の下部組織だが組織としては全くの別物であり、指揮系統も全くの別物だった。しかし、トップが同じ人物になったことから、最近では影星が夜吹の一族の傘下組織なりつつある。そのような背景から、影星は東雲家をあまり快く思っていないのか、当主が私になってからというもの今回のような嫌味を言い続けている。
「今回、あなた方に聞きたいのは菅生家についてです」
「……菅生家ですか？」
私が要件を口にした途端、彼の表情からは分かりやすく疑問が浮かんでいた。
「ええ。菅生家が六花において不穏な動きを見せています。確か、影星の傘下に菅生家お抱えの暗部がいましたよね？」
「ええ。彼らのことを探らせますか？」
彼はここまで聞いたところで、私がなぜここに来たのかを察したようだった。
「はい。これは東雲家からの依頼ということでお願いします」

「承知いたしました」
彼は膝をつき、頭を下げた。
（……忠誠心があるのやら、ないのやら）
私が頷くと同時に彼は姿を消した。
「……お送りいたします」
タイミングを見計らったように彼の使いの人が現れ、私も学園へと戻った。

「それで、収穫はあった？」
学園の寮の一室で、私は総司の報告を受けていた。
基本的に総司は仕事中は結果を得るまで私の元には戻ってこないため、こうして総司が戻ってきたということはそれなりに収穫があったということだ。
「辻斬りの正体が絞れました」
幾ら総司といえど、たった一日で正体を絞れたということは相手は隠す気などないということだろうか。
「辻斬りは……菅生信明本人である可能性が高いです」
総司は簡潔にそれだけを述べた。
総司自身はこれと言って尻尾は掴めなかったようだが、本家の方で菅生家から菅生信明へ入手経路不明の純星煌式武装が流れているという情報を掴んだとのことだった。
この情報だけで判断するには早いが、可能性としてはかなり高い。だが、菅生信明にはそこまでの星辰力はなく、純星煌式武装を持ったとしても序列上位者に闇討ちとはいえ勝てるとは思えない。
「……これは確定した情報ではないのですが…」
私が疑問に思っていることを察したように、総司は渋々ながら口を開いた。

9話

「菅生の強さは、各校の序列上位者に匹敵するかそれ以上かと……」
「……やっぱりね」
幾ら辻斬りとはいえ、それなりの実力がなければ序列上位者を倒すなんてことは出来ない。さらに、辻斬りに襲われた生徒は全員入院を余儀なくされ、辻斬りという存在を恐れているとのことだった。
それほどの恐怖を与えるにはそれなりの実力が必要になる。
「秘密のカギは謎の純星煌式武装ってところだね」
「ええ、その通りかと。そちらの調査はいかがしましょうか」
「そっちは影星の方で菅生の暗部を探らせてるから出てくると思うから、総司は引き続き菅生の身辺調査をお願い。菅生本人には決して勘ぐられないように」
「はっ」
総司は頭を少し下げるとすぐさまその場を去った。
(それにしても謎の純星煌式武装に、菅生家の暗部か。なんか引っかかるな)
現在判明している純星煌式武装の中にも使用者の実力以上の力を出すことが出来るものがあるが、それらは封印などがされ使用が禁止されている。
それ以前に、純星煌式武装は使用者を選ぶため菅生家が偶々手に入れたものだったとしても菅生本人に適合したのは奇跡に近い。
「……謎は深まるばかりか」
手持ち無沙汰となった私はそのままベットへと倒れこみ、意識を手放した。

数日後
あれからというもの、調査がこれといって進展することはなかっ

た。
　辻斬りによる被害報告もなく、調査を依頼した両者からもこれといった報告は上がってきていなかった。
　唯一の変化と言えば、序列四位に菅生信明という名前が羅列されたことぐらいだった。
（……まさか正式に勝つとはね）
　先日の決闘で菅生は序列四位に勝利し、正式に序列四位の称号を手にしていた。例の純星煌式武装は使うことなく、彼は魔術師として戦っていたのだ。膨大な量の星辰力を携えて。
「まさかですよね～。これで彼を現行犯で捕らえるのは難しいでしょうね」
「……クローディア。毎回のように私の居場所を突き止めるのやめてくれないかな」
　屋上で一人考え事をしていたはずなのに、いつの間にか現れていた人物の頭を私は軽く小突いた。
「けど、クローディアの言う通りだね。どんな手を使ったにしろ、菅生はある程度の実力は手にしてるみたいだし、これから辻斬りなんて真似はまずしてくれないだろうね」
「えぇ。恐らくですが、星辰力だけならあの孤毒の魔女にも匹敵するかと」
　私が小突いた額を抑えながら、クローディアは分析していた。
　クローディアが言うように彼が決闘で見せた星辰力は、かの孤毒の魔女に迫るほどのものだった。
「ただ彼の腰にあった純星煌式武装。あれが引っかかるんだよね」
　彼が決闘の際腰に差してあった純星煌式武装は、武器としての使用こそされなかったが明らかに起動されていた。
　これと言って能力が使われた様子はなかったが、明らかに異質ではあった。
「やっぱり、あの純星煌式武装を調べるしかないかな」
「ですが、純星煌式武装の情報なんて余程の理由がないと開示してもらえませんよ」

「まぁ開示してもらわなくても……ね」
そう言った私にクローディアは呆れたように頭を抱えると、「琴音はそうでした」とため息を吐いた。